
Misfortune with Aya ~ 未来からの軌跡 ~

零光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i s f o r t u n e w i t h A y a 未来からの軌跡

【Nコード】

N 2 0 6 8 B

【作者名】

零光

【あらすじ】

今までの16年の日常に変わった出来事なんて無かった。過去から偉人が来ることも未来から宇宙人がくることも。そんな当たり前の日常からどんどん軌道がずれていく主人公は奇妙な体験をしながら今までの日常の見方が少し変わっていく…

Capo〜プロローグ〜

これから先のことがわかっていればどれだけ簡単に行動が出来るだろう。

そう考えたのは何もこの広い世界で俺だけじゃないはずだ。

なんせこの世界には数え切れないほどの人がいる。数えられるとしたらそいつは神だ。賞状でもあげたいね。

そんな人がたくさんいる世界に居座るようになってから16年が過ぎた。

今や俺はどこにでもありそんな私立高校の昼寝シート兼机にもたれながら座っている。

今日から始まる2学年。高校生活が始まってからの1年間はとにかく何もなかった。

そりゃ体育祭やら文化祭やら…イベントはあったさ。もちろんそれなりに楽しんだ。

ただどこう…何か嫌でも忘れられないような強烈な一撃がまだ高校生活には無い。

と言っても今までにもそこまで痛烈な一撃は喰らってはいないんだが。ゲームでしか。

それにしても今日から始まった学校はやたら新鮮味もあり、周りにいるクラスメートも懐かしく思える。

そんなに長く会っていなかったわけじゃないのだが。春休みなんて夏休みに比べたらあつという間さ。

もし未来が分かるならこの先俺が卒業できるか留年するかも分かるだろうに…。

そんな事を考えてることが分かったのか横の席に座って春休みボケがまだ残っていそうな奴が話しかけてきた。

「お前はまだ自分の将来が見えたらいいのになあ。なんて夢物語を想像していた。どう？当たり前だろ？」

別にお前に指図されなくても夢物語だつて分かつてらあ。

そういうと俺はさっさと新品の教科書をロッカーに押し込むために席を立った。

先ほど俺の考えを見事に当てた金本はいつも俺の考えが分かるのか知らないがそんな感じで話しかけてくる。

…夢物語ねえ…。

ロッカーに教科書をしまい終わると丁度始業のベルとともにいつでも時間厳守の担任が入ってきた。

一人の少女と一緒に。

Cap1 encounter with...

その少女を見たとき俺にはゲームでしか喰らったことの無い一撃を不意に喰らった気がした。

どう見ても美少女。褒め過ぎって事は無いぞ。髪はストレートに肩下くらいまで伸び、細い体つきと整った容姿がより一層その美貌を際立たせていた。その辺の女子だって一部啞然、その他キヤーだの騒いでる。

男子は一部興奮状態、その他直視などなど…。要するに教室全員が見入っているわけで。

もちろんその中に俺も入ってる。

その美少女は教室をぐるりと見渡す。

俺のこともちゃんと見たかあ。

…なんて言ってる場合ではないな。

後ろの席にいる内田も珍しく目を丸くして直視していた。

内田は背が低く未だに小学生でも通用しそうな体つきでよく本を読んでいる。高校に入ってからたまに話す機会もあったが、本を読んでいるためかたまに難しい用語も使用する。

「……」

黙り込む内田の目は真っ直ぐにその美少女を見ている。

おいおい一目惚れか？

そして担任の咳払いが教室に 静まりなさい という命令を発した。

「それじゃあ自己紹介お願いね。」

あっさり言った担任の言葉よりもその美少女の第一声のほうが重要だ。古典なんかの授業よりも大事だ。俺が思うに。

「えゝ…浅川 綾。」

…綾ちゃんですかゝ…へ？終わり？

少しの沈黙を打ち破り担任がそれだけかと尋ねるも

「何か口を滑らせると…」

その後も何か言っていたように聞こえるがさっぱり聞き取れなかった。

俺の聴覚に全神経を向かわせたにもかかわらず聞こえなかったんだからしょうがない。

「それじゃあ私がある程度みんなに言っちゃっていいかしらね？」

そう言っで一歩前に出た担任がその綾さんのコクリと頷くのを合図に代理自己紹介を始める。

しかしその頷く仕草から見てもう可愛いなの。クラスの男子半分はやられたなこりや。

「えー…浅川 綾さん。16歳、親の理由により転校、好きなものは楽しいこと…」

なんじゃそりや。楽しいこと？カラオケでも好きなのかな？それとも天然気味なのか。

もちろんそこへの質問はクラスから沸くわけで。クラスの中の女子が質問した。

「それって…例えばどんなものの？」

すると綾さんは困ったような顔をしながらも、楽しそうに

「例えば…誰も知らないような異郷の地に足を踏み入れたり、未来にまで名前が残るような偉大な…」

すごい人だ。たぶん何かのアニメか小説を読みすぎたのだろう。そうに違いない。

しかしこんなに美少女な綾さんの口から自己紹介で異郷の地だなんてワードが出るとは思わなかった。

というかこのクラスの誰が予測できたか。出来た奴がいたらそいつは超能力者だ。

そんなわけで俺が、というか俺の五感そのものが捉えたこの”何か起こるぞ”的な予感の後々人生で初ヒットするなんて誰が予想できたか。

予想できた奴は超能力か何かの持ち主だ。

こんな前触れからその綾さんとの高校2年の白紙のページが書き始

められたのであった。

Cap2 Happen to meet you

その綾さんの席は俺からは近くは無く、かといって遠くも無く…
ちくしょうなんて思ったって空いてる席がそこしかないんだからしかたない。

その日は周りの女子と微笑みながら話したりしているようだった。
結局始業式なんていう形式だったものやら教科書の確認等を済ませているうちに今日は学校も終わった。

明日から平常授業の時間割が俺の時間を支配してしまうわけで…。
俺の家は学校から徒歩で行けないことも無い距離にある中途半端な立地条件でバスを使うのも面倒なので徒歩で通っていた。

帰り道の途中に何かお宝スポットや一大イベントが用意してあつてくれてもいいと思うんだが。

運命ってのは非情だね。

そんな考えていてもしょうもない事を考えていると運命が良いところを見せようとしたのか日頃の行ないか先方に綾さんが立ち尽くしていた。

これは話しかけるためのいい機会かも。そんな事を考えていると俺のそんな視線を感じ取ったのか彼女のほうがこっちに気づいたようでおぼつかない足取りでこっちに近づいてきた。

どう反応していいものか分からずに、とりあえず俺は よお と単調な挨拶くらいしか口から出なかった。

判断力がないのが恨めしい。

彼女がそんな俺を見てそのまま手に持っているメモを見るとにっこり笑って

「よかったあ。やっぱりこっちで合ってたんだ。」

…はい…？…初めての会話が十分噛み合っていないのですが…。

「あつ！…ええ…失礼。はじめまして。浅川 綾です。」

…どうやらこの方は天然属性のようですね。

それにしてもこっちで合ってたってのはどういう意味なのか。
もしかして俺に一目惚れ？

いやぁ照れますねぇ。

「…あのお…」

いつの間にか自分の世界に入ってしまったようで、彼女の声すら届いていなかったようだ。

「えっと…この時空…じゃなくてこの私たちが今立っている場所から最も短期間…いや、短時間で移動可能な駅ってどこでしょうか？」

…要するに最寄り駅ですよね？それなら…

そんな説明をしてここから徒歩5分くらいの駅の道案内をすると

「ありがと！」

それだけ言って俺の肩をポンと叩き、駅の方へ走っていった。

いやぁ…可愛いね。うん。

急に肩にポンつとやられるとくるね。こりゃ。俺のイベントも開催間近かな？

それだけの会話で打ち解けてくれたらしい綾さんは次の日の朝、俺が眠気に打ち勝とうと登校している時にも挨拶をしてくれてそのまま走って学校方面へ行ってしまった。

元気な人だ。

でも彼女の発言には何かと不備…というか説明されていない部分がある。

昨日の帰りに会ったときも、時空とかなんとか言ってた様な…。

そんな綾さんもたちまち学校では人気者になり、すっかり打ち解けていた。

学校で俺は主に横の席の金本というわけなんだが、昼飯の時にそいつはこっちの席に弁当を置き

「お前は一体何をどんなことでどうしてたんだ？」

意味が分かん。

そんな文法すら曖昧な文章で、意味不明な質問をいきなりされても答えようがないってものである。

「だからなんでお前が朝、浅川 綾におはようってにこやか天使スマイルをしてもらったのかって聞いてるんだ。」

なんだそのにこやか天使スマイルってのは。ってかお前は見てたのか。

お前はストーカーか。

そう言おうとした時にポツリと内田が呟いた。

「移行期間はもうすぐ。」

…たまにこいつは意味不明なことを言うが、今のもそれか？
というかいつから俺の背後にいる？

「完了。」

それだけ言って内田は廊下へ歩いていった。

今日は学食なのか？

金本の方に顔を向けると金本は口を半円状にあけていて

「なあ… あいつ前々から変な奴だとは思ってたが、どうも最近磨きがかかったよな。」

確かに内田は元々難しい発言はしていたが、2年になってからはその発言すら難しいより意味を捉えにくい物に変わっていた。

俺の理解力の乏しさもあるのかもしれないが、その点は金本といい勝負であろう。

その後の授業を受けている間に何回綾さんを見てしまったか。

この人は俺に気があるのかもしれないなんて思っていた。

そんな事を思っていると6限の終わりを告げる至福のチャイムが鳴り響き部活にも所属していないため俺はさっさと家路についた。

この学校では一ヶ月おきに男子と女子の掃除が入れ替わり、放課後掃除をするのだが、偶数月は女子の担当になっている。

俺は呑気に今日のテレビ番組表なんかを思いながら歩いていた。
明日から起こり始める微妙な変化に今はまだ気づくはずもなく。

Cap3 identity

次の日。

俺が目を覚まし、登校していると昨日のように綾さんが挨拶してくれた。

ただし今日は走っていかずに。

「もう学校には慣れた？」

いかにもありがちでありふれた質問だったが、今の俺からすれば彼女と話せる時間のひとつひとつが大事だ。

「うん！今のところ大きな事件もないし。」

事件って…やっぱりこれは天然の出せる技なのか。

「あつ…そういうばまだ言ってなかったんだけど、今日の放課後にこの前道教えてくれた所に来てもらえないかな？」

なんだこの上手く行き過ぎな展開は。

勿論行きますとも。どうせ帰宅途中だし。暇人です。

そう言うとな彼女は笑顔を見せると、とととと小走りで行ってしまった。

なるほど…天使スマイルね。

金本が言うのもたまには間違っていないじゃないか。

そっぴや今日も見張ってたりしないだろうな。

そんな考えはいらなかったようで、金本は遅刻してきた。昼に。

「お前は昼飯を食いに来たのか。」

そんな事を言っただけでやるとうるせいと言われその後は最近の映画の話なんかをしていたと思う。

悪いが頭に残っているのは綾さんの言葉と今日のロードショーくらいだ。

そんな虚ろな頭でも内田が何か呟いていたのは分かったが。

その日の体育で俺はサッカーボールを見事顔面でキャッチするとい
う痛々しい荒業を披露し、その痛みも忘れて放課後待ち合わせ場所
へと向かった。

そつえば綾さんは掃除だから俺が早く行っても意味がないんだよ
な。

そう考えつつも待ち合わせ場所に着き、携帯のアプリで暇をつぶす
こと約15分。

彼女が向こう側からやってきた。

こんな光景を金本に見られたら生涯恨まれるであろう。

「ごめんなさい！掃除で…」

いえいえ。あなたの為なら何年でも待ちましよう。

そんな気持ちでいた俺にとって15分なんて光のような速度であり
待ってる気なんか全く無かったのだ。

これで遅れてきたのが金本だとしたらその15分はとても長く感じ
られるものであろう。

立っているのも何なのでその辺にあったベンチに腰掛けた。

「ええっと…まず、私が話したことは誰にも言わないでくれますか
？」

もちろんですとも。約束を破るくらいなら死んでしまいそうです。

「それと…理解してもらえないかもしれないんですけど…信じても
られますか？」

はい。

それだけ言うと彼女は下を向き一瞬躊躇う（ためらう）ような顔を
したかと思うと、上を向いてすうっと息を吸って俺のほうをしっか
りとした目で捕らえて確かにこう言った。

「私は未来に影響を及ぼすことが出来るあなたを改変しようとする
分子からあなたを保護する為に未来から来ました。」

「……………」

二人分の沈黙が続いた。

Cap 4 unexpectedly

「私は未来に影響を及ぼすことが出来るあなたを改変しようとする分子からあなたを保護する為に未来から来ました。」

…もう一度お願いできますか？ゆっくり。

「少し分かりやすくとすると、私は未来の出来事を今から変えることが出来るあなたを悪用して未来を自分たちの思うがままにしまおうとする悪い人たちからあなたを守る為に来ました。」

…おいおい…これこそ夢物語か？

それとも…なにかのドッキリ番組か？

「…普通に考えると信じてもらえないですね…」

「いいやとんでもない。信じましょう！…とはいえイマイチ理解できていないのだが。」

要するに…綾さんは未来から俺を救うために来たってことで、俺を悪役から守ってくれる…つつう事でしようか？

「はい！その通りなんですよ！」

その通りらしいが、とりあえずなんで俺なんだ？わざわざこんな一般高校生を狙って襲撃してくる悪役もどうかと思うが。

それに悪役って事はそれなりに戦闘能力があったりしそうなわけで、綾さんが守ってくれるというのは有難いんですが、綾さんが戦うって言うのも想像が沸かないんですが…。

この華奢な体つきで大男みたいな悪役が出てきたらどうする気だろう。

「それは大丈夫です。悪役というのは…今の時代で言うとコンピュータウイルスのようなもので、それ自体に対した能力はありません。問題なのはそのウイルスが人に寄生出来るということです。寄生した後に増殖なんてパターンは無いですが、その寄生された人が何をしだすかは分からないので…その対策の為にワクチンはしっか

り学んでありますので。」

…とりあえずこの夢物語が本当なのだとしたら俺はなぜそんなに狙われるようになったんだ？

この前5000円札拾って交番に届けなかったからか？

「そんなんじゃないやしませんよ。ただあなたには決まっている未来を変える力があつた。それだけなんです。」

5000円は関係なかったか。

それより、俺がそんな能力を持つているなんて言うのも信じがたい。

「確かに信じがたいかもしれないですよ。でも本当なんです。」

そう言つと俺の肩にポンつと手を置いて

「この前肩に触れさせてもらったとき抗体をあなたに送信したからあなた自体はウィルスに侵されません。それからウィルスでまだ寄生していなかったものは全て駆除しました。まだわずかにですが反応があるので安心とは言えないんですけど…」

そんな抗体なんてものが俺の中にいるんですか？あ那时的の肩ポンにここまで理由があつたとはね。

にしてもだ…この話を信じたとしたら彼女は未来人ということになる。

とりあえずこのまま信じるのもあれなので質問もしてみようじゃないか。

「えつと…綾さんは未来から来たつて事になりますよね？」

そういうと彼女は首をやや傾けてはいとだけ答えた。

「じゃあ…どれくらい先なんですか？今から見て。」

そういうとポケットからこの前道を教えたときに持っていたメモを取り出した。

そういえばそれは地図とかではなかったんだな。

「どれくらい先なのかいえません。私には権限が無いので…」
なるほど…じゃあ…

「俺がどんな影響を与えるんですか？」

「ごめんなさい…言えないんです…もしあなたがそれを知ってしまったとあなたは無意識にその事を意識してしまったって未来は余計に変わってしまいます。」

「そういう事とかは言ってもいいんですか？」

「マニュアル上で定められてる範囲なら…もちろん私もたくさん教えてあげたいんだけど…」

とにかくだ。

彼女の言い分はこうである。

彼女は未来から来て俺を悪の組織から守るために来てくれた。

俺は未来を変えられる。

恐らくだがその寄生するウィルスがこの時代からいなくなれば任務完了。

そういうわけであろう。

「はい。そうです。…信じてもらえないでしょうね…。確かに私もいきなり言われたら焦りますよ。」

ちなみに俺は焦るところかももう平常心なのだが。

「とりあえず心の中で信じておきます。他の連中にはもちろん内緒で。」

そう言っていると彼女はまた天使スマイルを俺に向けて良かったと息のよくに漏らすともう帰らなくちゃと言つとこちらに手を振りながら俺の家の反対方向に歩いていった。

…未来人ねえ…。

そういえばメルアドくらい教えてもらっておいても良かったんじゃないかな？

この時代の携帯を持っていればの話だが。

Cap5 question

昨日は何か凄い出来事があった気がしなくてもない。

いきなりの未来人発言を喰らい、さらに俺がなぜか狙われていてその悪役から俺を守るために彼女は未来から来てくれたのだと。

俺は今年厄年か？不幸の年月を歩もうとしている予感がする。

こんな時なら財布を落としたくらい不幸なんか軽く笑ってすごせるだろう。

…嘘だな、さらに不幸が増えて欲しくはない。

そんなこんなで、俺は今、考えに考え寝むれないまま朝の3時を迎えてしまったわけだが、その間色々な疑問が湧きに湧き出て今綾さんがいたら質問攻めになっていたはず。

…そういえばいつも綾さんって呼んでたけどいきなり綾さんよりやっぱ苗字で呼んだほうが良いんだろうか？

…ってそんな事考えてる場合じゃないだろ？俺。

なんせ俺の置かれた状況なんて誰がしつかり俺が納得できる形で説明できるのか。

結局一睡もしてない俺はどうやら断末魔の叫びを聞いてしまったかのような顔つきだったらしく登校時に綾さんにおはようの天使スマイルより先に心配されてしまった。

あなたは元気ですね。ってか未来人とはねえ…。

そんな事を考えつつも大丈夫ですよと答えると、まるで1000Wの電球のような輝きスマイルを放って小走りで走っていった。少な

くとも俺にはそう見えた。

スタイルがいいのは未来人特有なのか等と考えてるうちに俺は睡魔などとつくに踏み倒していつもの調子にほぼ戻っていたが昨日のことがいくらかストッパーにはなっている。

考えても見ろ。未来人だぞ？

さてさて俺の周りはどうしちゃったんだ？

「お前は浅川 綾に昨日何をした！」

教室に入っていきなり詰め寄るな金本。

顔が近いんだよ。顔が。

べつに何も疚^{やま}しい事はしてないし、というかお前が遅刻ギリギリどころか俺より早く学校に来るなんて意外だな。

いや。その前になんでお前がそこまで知ってるんだよ。やっぱりストーカーか？

「俺が気持ちよく清々しい下校を味わっていたらお前と浅川 綾が二人で。いいか？二人つきりでいたんだぞ？眠れるもんか！」

寝てないのは俺も一緒だ。

「とにかく事情を俺が分かるようにしつかり、かつ簡潔に難しい言葉は使わずに説明しろ！」

そんな金本の要求を渋々受け入れ嘘を9割いれた説明をかなり真面目に聞いていた金本はすんなり納得した。

俺の説明はきつとこんな感じであったと思う。なんせ大嘘なんで口

から出任せだ。

俺は帰りに財布を落としてしまった。
探しているうちに下校中の綾さんに偶然鉢合わせした。
優しい綾さんは俺と一緒に財布を探してくれていた。
すると財布は見事に見つかり俺はお礼として飲み物を奢^{おご}ってベンチに座っていた。

それだけでなんと金本は納得したのだ。
単純で良いね。

俺なんか複雑に悩んでるぞ。これでも。

とりあえず授業の時間を使って綾さんに質問することをまとめ、もう一度今度は俺から誘って質問させてもらうことにした。

綾さんはあっさりOKしてくれ再び昨日のベンチに二人で腰掛けた。
今日は金本が下校してから時間を置いた完全な作戦だ。

「昨日のことなんですが…」

俺が言い出すと綾さんは分かっていたように

「まず、私がどれくらい先の時代から来たかはいえません。それとあなたを狙っている分子は現在判明して

いる物で”二つ”です。一つは子機、もうひとつが親機と考えてもらっていいです。これ以上の分子が今現在

のこの時代に存在している確率はこの時代で言う0・000132%です。」

俺はこの人の予知能力的力にびっくりした。

いやはや俺がしようとしていた質問の一つ目は答えられてしまった。未来人だから当たり前なんだろうか？

びっくりしている顔が分かったのか綾さんにはっこり笑い

「他の質問内容は忘れちゃったのでお願いします。確かあと2つだったと思いますが…」

ビンゴ。

確かにあと2つだ。

この人は未来人じゃなくて透視とか相手の意思が読めるタイプの超能力者じゃないか？もしくは未来人兼超能力者。

「じゃあ質問です。俺の肩に抗体があるって言いましたよね？それってどのような物なんですか？…出来れば高校生に理解できる程度に説明していただければ…」

いきなり大学生でも分からないレベルの用語を使用されても困るのですね。

勉強は俺の不得意分野だ。

得意分野は寝ることか？

「その抗体は私の持っている中で一番強くて頼れる抗体…ワクチンで種類はA C T - X 1 6 7 Iと言います。効力とし

ては…なんていえばいいんでしょうね…あなたにウイルスが直接接触れようとしたときには相手体内に侵入し

ウイルスを破壊します。あなたの皮膚上約0.00012mmの膜を張っています。もちろんウイルス以外の固体には無害です。です

のであなたにも一切害は無いので安心してください。」

とりあえず良かった。俺は肩から何か得体の知れないものが生えてきたりしないか正直心配だった。

綾さんを疑うんじゃないが抗体っていう名称が気になったのだ。辞書も引いた。

「安心しました。じゃあもう一つ…その分子なんですが、誰…というか…どんなやつか分かりますか？」

そういうと今までの綾さんの天使スマイルは一気に翼の無くなった天使同様に笑みが無くなってしまう俯うつむいてしまった。

「…ごめんなさい…。まだ確定できないんです。相手がどんな能力でどんな人でいつ攻めて来るか。こちらから攻めることも考えたんですが、私が行ってもし相手が罔おとりだったら…あなたに危険が及んでしまいます。」

そこまで俺は狙われてるのか…段々嫌な予感がしてきたが…。

「それでも私が出来る限り守ります!」

その一言で大分勇気付けられます。ところで綾さんってどうやって戦うんだろう？

散乱銃でも隠し持っていたり…しないか。

そんな感じで俺の質問タイムは終わった。

俺は綾さんに缶ジュースを一本奢おってあげるとのろのろと家路に付いた。

ジュース一本で喜んでくれた綾さんの顔が頭を過よぎる。

家に帰ると俺はベッドに仰向けに寝転がって色々整理してみた。
俺の頭の中でだけ。

そうしているうちに携帯の着信音が鳴り始めた。

そっぴいや綾さんのメルアドまた聞きそびれた。

電話の相手は中学で一緒だった岡田でよく遊んだいわば親友だ。

あいつのほうは何をやるにも優秀だったから俺は何やっても負けてたが。

「おう元気か？突然で悪いんだけど今からあそこ。来れるか？」

あそこ。というのは中学のときから俺が岡田といつも遊んでいた場所
所で用水路近くの公園跡地だ。

正確に言えば公園なんだが、何も無い。おまけに地面はでこぼこで
球技にも不向き。

だからこそ人気が少なく遊びやすいのも事実ではあったが。

俺はまだ6時にもなっていない時計を確認し了解の意を伝えると自
転車に乗ってその公園跡地へと向かった。

Cap 6 truth

俺がそこに着くと岡田はそこでテニスラケットでボールを器用に空中に上げたりと雑技団のようなことをしていた。
こいつはテニス部でまずまずな成績を残していた。

「相変わらず運動神経がいいな。」

俺がそう言いながら近づくと岡田はこちらを向き、俺の顔を見ると鼻で笑ってきた。

いつもはどちらかと言うと温厚な性格だった岡田なので少し驚いた。

「何かついてるか？」

そういうと岡田はボールを宙に弾くとテニスラケットを手の中にしまいこんだ。

…何？

今岡田の手には確かにテニスラケットがあつて…そっぴやボールだつて空中にさつきあげたつきり戻ってきていない。

んなアホな。

俺はなんだか危ない予感を体で感じ急いで自転車に乗ろうとした。
だが自転車なんて無い。

自転車どころか俺が後ろを向くと俺の後ろの景色全てが無くなっていった。

俺の振り向いた所には真っ暗な闇以外何も無い。

岡田のほうを向くとテニスラケットはいつの間にか銀色の鎌になつていてそれはまるで死神だった。

…なるほどね…。

こんな状況で納得してしまう俺もどうかと思ったがなんにせよこの状況が理解できてしまったのだ。

あいつが…岡田が俺を狙う分子…まあウイルスに操られている。そんな所なんだろう？

あいつは親玉か子分のどっちかだ。

…標的は…多分…俺。

「お前が俺を狙って未来からやってきた悪役か。」

自分でも真面目に声が出てるかは分からない。

それでも恐怖感はかなり感じている。

あの鎌は怪しい光を放ちながら少しずつ…今も大きくなっている。3mはあるんじゃないか？

あんなんで襲いかかられたら俺が鋼鉄でも切られちゃうだろうさ。

岡田も徐々に大きな熊のように変身していた。

鎌を持った熊の死神ね…んな無茶苦茶な。

「…」

岡田は黙ったまま鎌を少し動かした。

惚けている暇は無い。

俺の鈍い運動神経が限界速度で働いたが俺が右に転がると元いた場所には鎌の切っ先が一閃、鈍い空気の振動音を響かせ空間自体を切り裂いていた。

アホか？

今鎌からビームみたいに何か光線が飛んできたぞ？

俺の相手は本物の死神か？

というか俺の何がそこまで奪いたいんだって？

未来を変える能力？

余計なもん具えて産むなよお袋。

もう岡田と俺以外は何も無い、地面も空も真っ暗だ。

俺はこんなときでも冷静さを取り戻すことが出来たのがこの場の奇跡だと思っている。

さっき上に飛んでいったテニスボール。

あれが何も無いわけないだろう…。

俺の予測は正しく上から何かの降下音が徐々に大きくなっていた。見ると…隕石？

おいおい…俺の目の前にいる死神は何かのゲームのラスボスか？強すぎるだろう？

まるでRPGで冒険始めの主人公がいきなりラストダンジョンにこのこやってきたような格の違いだぜ？

もう避けられやしない。最初の一撃は俺の全能力の抵抗だ。もう動けやしない。

だが隕石は俺の体に触れるか否やの場面で一時停止した。

するとそのまま隕石は意思を持ったかのように死神の方へ一直線に飛んでいきそして直撃した。

一体何が起こったんだか。理解するのはそう難しくも無かった。

隕石の煙幕が徐々に晴れていきそこには二つの影があったのだ。

一つは岡田。

もう一つは間違えるはずも無い。

紛れも無いクラスの人気者兼未来人。

浅川 綾。

「大丈夫ですか？」

優しく手を伸べてくれた彼女に俺は何をしてでもお礼をしたい気分だった。

どうかさせてください。

「それよりごめんなさい…分子の動作状況を確認できませんでした。彼は子分レベルの方でいわゆる手下です。親玉ではありません。あの程度なら私がすぐに倒せますので出来るだけ私の近くに…手でも掴んでいてくれればうれしいです。」

手を握れと言われているようなもんだ。

俺はこの幸せ状況を楽しむような余裕を残念ながら今持ち合わせていないため機械的に綾さんの手を握ることしか出来なかった。

「それじゃあいきますよ！」

そういうと隕石でだいぶヒットポイントを減らされた死神に綾さんは指差しをして何か…”クランブル”だかなんだか呪文を唱えたように聞こえた。

その綾さんの呪文はRPGで表すと最高位の黒魔法のようなもので無数の光が死神に突き刺さった。

それだけであつという間に死神はいなくなりこの無の空間だつていつの間にか公園跡地に戻っていたし自転車もあつた。

岡田の姿は無かったがそこには綾さんが俺と手を繋いだままの状態で立っていた。

「大丈夫ですか？良かったです…無事で…。」

そう言うとき綾さんは涙目で俺を見てきた。

そんな目で見られちゃったらどんなことされても許せますよ。…そういうえば岡田は無事か…？

「彼は大丈夫です。この事とは一切関係なく…たぶん自宅にいます」と

思いますよ。彼にこの記憶は一切ありません。」

なるほど。ウィルスに感染された本人は何も気づいちゃいないのか。ウィルスは怖いね。

「ご迷惑おかけしました」

綾さんはそういうとぺこりと頭を下げ

「これでもう一人。親玉だけです。それにもう人物の確定は出来ませんでした。」

それは誰なんですか？

俺がそう問い帰ってきた言葉には意外性も含まれていたが俺が納得できないような相手でもなかった。

「その親玉に感染された本人は無事なんですよね？」

そういう問いに綾さんは絶対大丈夫ですとガッツポーズをしながら答えてくれた。

そいつをウィルスから解放する為に俺たちはある所へ全速力で向かった。

早くウィルスから開放してやるために。

Cap7 culprit

二人で向かった先はここからいつもの道を通つての学校。

校舎の電気は全て消えていて俺には風の音しか聞こえない。

綾さんの方は反応が強くなっているとだけ言いながら真面目な顔で校舎へ左手を差し出した。

その左手が差し出された先には靄もやのような何かはつきりしないものがあった。

その靄は今まで空中を漂っていたが次第に形を作り出し、やがて親玉へと変貌した。

確かにこいつの言っていることは難しい。

だけど最近のこいつは更におかしかった。

「なあ、内田。」

そこにいたそいつはやっぱりいつもより一層何か危なそうなオーラをまとっていた。

まるで何かを呪いたがっている様に見えた。

綾さんはそいつにすかさず人差し指を向け何か小さな水滴らしきものを内田に放った。

綾さんの顔に驚きが表れたのもその瞬間で。

その水滴を一瞬にして蒸発させてしまう位の熱気が内田の周りを渦巻いていた。

「まずい……」

それだけ言つと綾さんは地面に手を置き、そこから光の檻を出し内

田をその中に入れた。

俺は目の前で起こるSFか何かのCGみたいな光景にただポカンと
しているしかなかった。

そのポカンとしている間に内田の周りの檻から煙が立ち上り、そし
て檻は消滅した。

その煙が晴れる頃には内田は内田では無かった。

「亜種X - CV265DR…」

綾さんの言葉の意味は分からなかったが俺たちの目の前にいた内田
は驚^わよりも大きくて頑丈そうな翼にクロコダイルのような顔、そし
て強靱^{くわ}そうな体。

まさにドラゴン（竜）だった。

それも俺がゲームなどで見るような感じではなくもつとゴツく、ど
ちらかと言うとワニの進化系のような姿がゆっくり下降して…

「ミラージユ！」

そんな綾さんの呪文で意識を取り戻した俺は竜の吐き出した炎から
避けることも出来ずに棒立ちだった。

綾さんの唱えたバリアのような物が俺の手のすぐ届く場所で炎をど
うにかはじき返している。

しかし相手の竜が自分の吐いた炎の中へ突っ込み俺に突進してきた
時にバリアは粉々に砕け散った。

しかし竜は俺の体に触れずに…というよりも触れないように飛んで
いった。

何故だ？

俺の頭に何か引っかかるものがある。

何か理由があるはずだ。

岡田が攻撃してきたのも遠距離だったし…今回だって…

俺に触れるとまずい理由…。

俺はこの理由が分かってしまった。

俺の肩にある抗体。綾さんの言う一番強い抗体。

綾さんは竜の吐く炎をどうにかバリアではじきながら防戦一方だ。校庭が火の海へと変貌している。

どうせこのままなら俺が行動すればいい。

やればいいことは大体分かっているし単純明快だ。

俺は未来を変えられるんだろ？

だったらこんな竜倒すのくらいいけないさ。

肩からあいつに体当たりしてやればいい。

そんな考えで良いのか冷静に考えれば思うだろうがこんな灼熱の場所ですべて冷静になっていられるほど俺はクールじゃない。

「綾さん！あいつを地上に降ろして下さい！」

いきなり話しかけられた綾さんはバリアを使い炎から身を守っていたが俺の考えが分かったようで一回小さく頷くと何か呪文を唱えていた。

…

上から何かが落ちてくる。

…でっかい氷の塊だった。

竜はそれに気付いて上へと炎を吐いたが上に吐いた炎の衝撃で体はノーガードでしかも地上付近まで下降していた。いける。

俺はラグビーもアメフトもやったことが無いがやけくそでそいつに肩からタツクルしてやった。
竜の腕にヒットした俺の肩からは無色の波状の輪が現れ、その輪がやがて空間を作り出しブラックホールのような穴が出来た中へ竜は吸い込まれていった。
…終わった？

次の日の学校はやけに普通だった。

全く焼け野原になんかなっていない学校。

相変わらず話しかけてくる金本。

そして昔のように少し難しい用語は使ってくるが、俺にも理解できる用語も話せる内田。

何もかもが元通りだった。

あの後俺は綾さんと二人で校庭で敵を倒した後の余韻を味わっていた。焼け野原となった校庭で。

「本当に凄いですね。自分から体当たりなんて。」

「そりゃワクチンが俺にもあるんだから俺が体当たりしても効くんじゃないかななんて思っただけ。」

しかし怖かったかどうか聞かれると前者だなこりゃ。

あんなもんが俺の命を狙って来たとなると未来の俺はどれだけ凄いくらいなことになっているんだか。

「言えません。」

釘を刺されたが、これで悪役はこの時代にはもついないと言った。

それは保証できるらしい。

安心して眠れるぜ全く。

校庭や岡田、内田等この事件で起こった事は全てもとの状態に書き換えられ…つまり俺と綾さん以外には何も変わった事は無かった。ここまでの数日間が嘘のように平凡な日々だった。

「俺が未来を変える…か…。」

結局のところ俺に本当にそんな能力があるのかどうかも、次にいつ狙われるかも分からない。

でも一つだけ確かなことは

俺の知り合いに未来人がいて、それは夢物語でも、夢でもない現実だと言うことだろう。

くエピソードく

その後は今まで同様、変わらない高校生活を過ごしていた。

：一つ変わったと言えば綾さんがいるが、それでも平凡な高校生としての日常を送っている。

特に未来から来た変な奴らに命は狙われはしなかったし、事件と言う事件も無く。

もしかしたら綾さんが影で暗躍していたかもしれないが、俺は知らないし、綾さんも慌てふためいた様子は無かったから大丈夫なんじゃないだろうか？

結局のところ俺が持っていると言われた「未来を変えられる力」なる物はどのような者だか未だに分かっていないし、実感なんか無い。少なくとも今の俺にはその能力を自由自在に操ったり変えられる能力はまだ開花していないんだろう。

変えられるなら俺のテスト無様な結果ももう少し良いものになっているはずだ。

テスト中に俺は解答が答案用紙に浮かぶように念じてみたんだがな。大体、未来も宇宙も俺に少し冷たくないか？

もう少し分かりやすい解説付きで俺にその力をくれ。

俺はまだ操作方法すら知らないんだから。

「きっといつか分かりますよ。」

そう言った綾さんの言葉がいつ現実となるのだから。

分かりたいような気持ちもあるが分からない方が良さそう...

確かに未来が自分の意のままに操れるのも悪くは無いが。

しかしそんな能力は開花してもしなくても俺としてはどうでもいい。今こうやって普通の高校生活を過ごしている今が続くだけでも十分幸せじゃないか。

俺のステータスなんてそんなもんだ。平凡で飛びぬけてない。
だから楽しく過ごせているって言つのもあるんだろうな。
俺は未来とやらの運命に逆らわずに生きていくつもりさ。
これまでもこれからも。

くエピソードく（後書き）

初めて書いた長編（これでも短い方に分類されちゃうのかな？）ですが、選んだジャンルはファンタジー。

なぜにファンタジーと言われても、昔から宇宙とか未来とかそういう話が好きなんですよね。

それでも自分でも書けると良いなあ、なんて思ってたんですが今回携帯小説という形で実現でき嬉しい反面難しさも体を持って体感しました。

まず話の筋をしっかりとらせなければいけないので色々な登場人物も考えた挙句、登場したキャラは少ない等……しっかりとできてないじゃん！という苦情が自分の中でプクプク浮かんでおります；

それでもしつかり最終話まで書ききれただけでも自分としては達成感があり、楽しかったです。

私の周りにいる人もひょっとしたら現代人ぶった未来人かもしれないですし、この話みたいな出来事が秘密裏に起こっているのかもしれないませんが、それは当事者の方々に任せてこの辺で私は失礼させていただきますましょう。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2068b/>

Misfortune with Aya ~ 未来からの軌跡 ~

2010年12月30日02時22分発行